様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月１５日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２００６年度～２００８年度
課題番号：１８３００２０７
研究課題名（和文）体育科教育における目標・内容システムの構成
－身体運動文化の主体形成活動の組織化－
研究課題名（英文）　On the System of Objectives and Contents of Physical Education : Organization of Subjective Activities in Culture of Physical Movement

研究代表者
森　敏生
武蔵野美術大学・造形学部・教授
３０２００３７２

研究成果の概要：

本研究では、スポーツを含む人間の身体運動に関わる文化の継承と創造の実践的な担い手を形成するという立場から、実践の主体と客体となる文化を結びつける体育科教育の目標・内容システムの構成を明らかにしようとした。その結果、体育の教授－学習の対話的・探求的・協同的な相互作用において、発達のニーズに応じて「ともにうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」「ともに意味を問い直す」という三位一体の活動システムを立ち上げ、技術性・組織性・社会性の体系をもつ対象と関連した矛盾の顕在化と解決過程の組織化が本質的過程として見出された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	2,600,000	780,000	3,380,000
２００７年度	3,100,000	930,000	4,030,000
２００８年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総　計	8,700,000	2,610,000	11,310,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　・　身体教育学
キーワード：体育科教育、身体運動文化、目標・内容、活動システム、学力と人格

１．研究開始当初の背景

（１）７０年代後半からおよそ３０年間継続的に追求されてきた「楽しい体育」の見直しが叫ばれ、「いま、学校体育がすべての子どもに保障すべき能力は何か」が鋭く問われている。その中で、体力と技能を含む多義的な「身体能力」や形式的・抽象的な「態度」の形成が目標・内容論議の中心に浮かび上がっている。加えて、学習の成果を実証的に（数値で）示すことが期待されている。
（２）これら体育科教育の目標・内容構造の転換と再構築が、かつての「体力づくり」体育や「運動技能」中心の体育に逆戻りするこ

とに帰着してはならない。体育科教育への現代的要請に応え、教科の存在根拠や本質理解を深める目標・内容論が求められている。
（３）したがって、体育科教育の根拠となる身体運動文化の人間形成的価値を見据え、客体としての文化と主体としての子どもの人格や能力との相互関係をダイナミックに織りなす目標・内容の構成が解明されなくてはならない。

２．研究の目的

（１）本研究では、体育科教育における身体運動文化の創造と実践主体の形成をめざす目標・内容システムの構成を明らかにすることを目的とする。
（２）そのために以下のような研究課題を設定する。
①体育科教育に固有の身体運動文化と実践主体が織りなすダイナミックな関係を活動システムとして解明し、これを方法論的基礎とする。
②体育科教育の固有の学力と人格形成機能（教育的価値）について、文化と主体を相互に媒介する活動システムの階層性と協働性という観点から捉え直す。
③文化と主体を媒介する先駆的な実践を本研究の方法論的基礎に基づいて分析し、これからの体育科教育の目標・内容システムの構成を導く理論的基礎と実践的な手がかりを得る。

３．研究の方法

（１）これまでの目標・内容論及び改訂指導要領の目標・内容論について、特に「身体能力」ならびに「態度」に関するものに重点化して検討する。
（２）方法論的基礎となる活動システムの解明のために、認知・学習論における活動理論とスポーツ運動論における活動理論を検討し、身体運動文化・スポーツを活動理論から基礎づけるとともに、教授－学習過程もまた活動理論的に捉え直す。
　さらに、こうした方法論的基礎から、体育の教授－学習過程における異質協同の学習の構成、中核的目標・内容である技術認識の発達の筋道、技術の探求的な学びのあり方を検討する。
（３）体育のカリキュラム開発過程における目標・内容の構成について、とくに実践を基盤とした自主的なカリキュラム開発を可能にする目標・内容の構成原理・原則と実践的な手がかりを検討する。
　また、子どもたちの学びの経験と履歴の調査の結果から、現況の体育実践の目標・内容が子どもの学習成果や構えにどう反映されているのかを明らかにする。

４．研究成果

（１）これまでの目標・内容論の検討
　①目標・内容論の課題
　これまでの体育科の目標論は、身体的・体力的目標、技能的目標、社会的目標の３つがほぼ共通に掲げられ、その時々の社会的要請のもとにどれかに重点が置かれてきた。ここ30年間近い「楽しい体育」路線では、「楽しさ」と「関心・意欲・態度」に重点化され、その結果、身体的・体力的目標や技能的目標に関わる能力低下が問題になっている。
　他方では、体育で教えるべき教育内容の体系や系統を明らかにすることが求められている。これらのことは、これまでの目標・内容論において、教科が身につけさせる主体の能力や資質と、教科で教えるべき文化（身体運動・スポーツ）や科学の内容とが関連づけて捉えられてこなかったことを示唆している。理論的には、主体（主観）と客体（客観）を統一するカテゴリーの解明の必要性を示唆する。
　②指導要領改訂における目標・内容論議
　今度の指導要領改訂論議における体育科の目標・内容の構造にも曖昧さが残る。「身体能力」論議は「動き」「技能」「体力」を混在させた多義的な内容をもち、全体的な教育課題としては「体力」の育成が強調されている。「態度」の目標においても、運動の学習にともなう規範的態度、情意的態度のみならず、全体として道徳との関連性も指摘されている。
　学校段階の接続および発達段階に応じた目標・内容の体系化・系統化が「４・４・４の原則」に即して図られている。内容の系統を明確化するように改訂されているが、いくつかの課題もある。目標・内容の体系化・系統化は「身体能力」（体力・技能）目標を軸にしており、認識目標や社会的目標と関連づけた統合化が必要である。運動領域の構成原理が必ずしも一貫性をもって示されていない。指導内容の詳述化に関連して実践的な創意と工夫がいっそう求められる。

（２）「身体能力」形成をめぐって
　①「身体能力」形成に関わる諸相
　今度の指導要領のキーワードである「身体能力」という多義的述語は、結局、指導要領の目標・内容には記されていない。しかし、身体形成・身体能力形成の位置づけがあらためて検討された。これについては、「フィットネス教育」論、「楽しい体育」論、「からだつくり」理論、「からだ育て」論、運動文化論など、様々な立場からの問題提起がある。これらは、かつての体力主義・体力管理主義

とは異なり、体力水準の最適性の追求や防衛体力面への着目、文化との関連性を重視している。

②「運動技術」の位置づけ

運動文化論においては、「運動技術」が身体的存在である主体と運動文化という客体を身体形成という課題のもとに統一的に捉える環となるカテゴリーに位置づいている。「運動技術」の獲得とは、人間の身体運動を人類史的普遍性と規則性を反映したものへと洗練化・人間化することだからである。

③「活動」というカテゴリーの導入

主体と客体を統一的に捉える鍵は人間の「活動」というカテゴリーにある。それは社会的・心理的・生理的なものの統一システムである。文化性をともなう運動技術が要求する身体形成もまた、体力要素に還元できず、活動の全体構造に及ぶ身体形成と捉える必要がある。他方で、文化的価値の正当性や妥当性が身体形成の可能性の制約・拡大、部分性・全面性という観点から問われる。

④技術習得と体力の関係

小学校の体育授業において技術習得と体力との関係を実証的に検討した結果、グループ学習を取り入れた「技能習得」が体力テストの伸びに反映していたことが明らかになった。とくに低体力群が減少し分布が高い方にシフトした。このことは、仲間とともに「わかり・できる」技術学習の達成を図ることによって、取り立てて「体力づくり」をしなくても体力の伸展が期待できることを示唆している。

（３）社会的発達をめぐって

①学校体育における社会的目標の位置

学校体育における社会的発達課題は戦後民主体育の中核的目標・内容に位置づけられたが、授業方法論を欠いたために形骸化した。その後、社会的目標は「技能」とともに「態度」として指導要領の目標・内容に重要な位置を占めている。

他方では民間の教育研究活動において体育独自のグループ学習（異質協同学習）の授業方法論が生み出された。

②社会的目標への新しいアプローチ

「人格形成」や「社会的スキル」の行動目標化とプログラム化は、本来は人格的全面性と主体性が問われる資質に対して、単元レベルの効果を問題にしており、直接的で形式的な行動・態度形成につながる危惧がある。

③人格構造論に立脚した視座

知識・技能等の獲得が目標となる授業では人格的志向性の論理的基盤となる世界観の形成を媒介にして人格形成に迫ることが原則となる。世界観は現実性・体系性・価値・立場を属性としている。体育授業に引き寄せれば、子どものスポーツ現実・生活現実・価値意識に立脚し、スポーツ活動における感情・認識・動作を総動員して、スポーツ観や身体的存在としての自分と他者の見方を揺さぶる学習を組織することが必要である。

④社会的発達課題への実践的試み

就学前の体育指導では、運動あそびを媒介に本気で競い合える＝遊び込める関係を創り出すことに焦点があてられている。そこでは遊び込むことと問題を解決するルールづくりと友達とつながりあうことが三位一体的に追求されている。

中・高校の体育実践では、生徒の人格発達・自立へのニーズに応じた（発達課題にふさわしい）教科内容・教材の構成がポイントになる。そこではスポーツという文化と生徒のニーズとの間に生まれる本質的な矛盾に目を向けさせ、自分たちのニーズを反映した文化の創り変えによって矛盾を克服する協同の学習が組織される。その中で生徒のスポーツ観や自分・他者の見方を変える指導が展開されている。

（４）体育科教育における活動システム

①活動システムモデル

活動システム論は、主体と対象および両者の関係を媒介する手段からなる対象的活動が、共同する集団、規範やルール、分業や役割配置のもとで展開されていることをモデル化している。さらに、異質な活動システムが互いの境界を越境し自律的・協働的に結びつくことで現実を変える革新性が生まれると考えられている。

②スポーツという活動システム

スポーツ運動は生理心理社会的な統一単位であり、活動・行為・動作という階層構造をもつ。スポーツの達成能力は立場やモラルなどの精神的要因、技術・戦術的要因、コーディネーションの要因、コンディションの要因、体格的要因の複合システムである。

現代社会にあってスポーツという活動システムは複合化、多様化している。それは対立、葛藤、矛盾をはらみながら異質な文化と混淆し新たな変貌をとげている。多様な目的・動機のもとに様々な身体運動競技やスポーツが展開され享受されている。競技スポーツに限定されない多様性をもった身体運動文化の活動システムの解明が求められる。

③体育の教授–学習活動

授業実践は教師を主体とする教授の活動システムと子どもを主体とする学習の活動システムとが相互作用・対話する過程である。体育の教授と学習の相互作用・対話を媒介する対象は、目標・現状・課題という３つの相で立ち現れる身体運動文化の実践、とくにスポーツという活動システムである。この実践（活動）の主体形成に向けて、「ともにうまくなる」「ともに楽しみ競い合う」「ともに意

味を問い直す」という３つの相互に関連しあう目的・動機（何のために、何をめざして）の定立が図られる。これらは、技術性・組織性・社会性からカテゴライズされるスポーツ文化の全体系と呼応した対象化と獲得につながる。

④異質協同の学習活動の構成

異質協同の学習論の研究課題は、教科内容の体系化・系統化と主体的・自治的なグループ学習の方法や意味とを相互に関連づけて構成する方法原理を解明することである。小学校と中学校の体育実践の分析を通して、異質協同学習の基本的な構成について検討した。

体育実践では「ともに楽しみ競い合う」ためのルール学習と「ともにうまくなる」ための技術学習が両輪のように関連づけられながら展開される。これらの学習対象をめぐって教師と子どもおよび子ども同志の対話的・水平的関係がつくられる。その中で集団への発問やゆさぶりが学習の目標や対象をめぐる相互の矛盾や葛藤を顕在化させる。この矛盾や葛藤の顕在化が、自分たちの活動を自省し互いの合意と納得を探究する「ともに意味を問い直す」メタ学習を求める。このメタ学習においては、発達段階に応じた科学的認識や社会・文化的認識が、矛盾や葛藤を乗り越える潜在的あるいは顕在的な指針や方向づけとなる。目標・対象の認識や意味をめぐる異質な他者との対立・葛藤・矛盾を内在させた多面的・重層的な学習過程は、学力と人格形成を統一する契機をもっている。

⑥子どもの技術認識の発達

子どもの技術認識の発達の筋道を捉えるために、小学校中学年と高学年の認識内容を比較検討した。その際、運動結果の認識、運動技術の客観的認識と主体的認識を分析観点として設定した。その結果、指導内容として技術課題が明確に位置づいていること、実験などの方法で技術課題が子どもにわかりやすく提示されることが技術認識を促進することが示唆された。また、「結果」「課題の名称」「課題の感覚的理解」「課題の仕組みや解決方法」「自分なりの課題の仕組みや解決方法の解釈」「分析・総合」といった認識発達の段階が仮説的に導かれた。

⑦高校体育の目標・内容への考察

「42.195㎞リレー」というマラソン競技の疑似体験を高校生に求めた実践を手がかりに、高校生にとっての学びの意味や学び甲斐の対象を探り、高校体育の目標・内容について考察した。

競技を自分たちの企画のもとに創り出す活動は技術性、組織性、社会性に関わる内容への広がりをもつ。その中で高校生にふさわしい「基礎技術に対する深い学び」、「技術の構造的認識」の探究的な学びが求められる。身体運動文化というリアルな対象を明確に位置づけ、運動技術の現実的意味と人間的本質を探り出すように、知性と対話の協同に開かれた学びをつくりだすことが必要である。競い合いを楽しんで能力を高め合い、人間的本質を讃え合う文化の再創造・変革をめざす。授業実践では、具体的な学習内容や探究方法が共同決定され、それにともない教師の教科内容・教材認識が組み替えられる。

（５）体育のカリキュラム開発と目標・内容の構成

①目標・内容編成の原則

体育実践に基づく教師による体育カリキュラム開発の実現過程について考察した結果、固有の体育教育学的コンセプトに基づいて学校体育の目的や実践課題を引きだし、そこから授業実践につながる教科内容の領域ならびに階層構造による具体化が図られていた。運動文化論に立った体育教育学的コンセプトからは「運動文化の継承・発展・創造の主体者形成」という目的、ならびに運動文化の技術性、組織性、社会性の全体系を学習対象とする実践課題が導かれている。

また、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州（ＮＲＷ州）のスポーツ指導要領開発においては、「スポーツの中の行為能力」論を核とするスポーツ教育コンセプトに基づいて、「スポーツの中の教育」という目標に「スポーツを通しての教育」という目標が統合され、教育学的パースペクティブが強調されて、内容編成においては脱スポーツ種目主義への移行があった。

②目標・内容の系統化

中学校体育の先駆的自主編成カリキュラムを検討すると、目標・内容の系統化の基本的な方針が３年間の学年テーマに示されていることがわかる。具体的には、１年は「科学との出会いと驚き、感動」、２年は「審美眼、戦略・戦術眼、分析眼をつくろう」、３年は「味わう、生活の目、歴史の目の育ち」という学年テーマの系統が示されている。あるいは、１年「スポーツ文化の目覚め、仕組みを調べ、わかればみんなができる」、２年「スポーツのあり方を考え、集団の中で生きる」、３年「生涯スポーツに向けて、計画・運営を自分たちの手で」というテーマ構成である。ここから、次のような目標・内容の基本的な系統化が示唆される。第１に技術を科学的に捉えることで誰もがうまくなる感動・体験をすること、第２に競争のあり方を問い、技術・戦術の質を評価・批評・鑑賞する力をつけること、第３に自分の生活や社会の中でスポーツを味わい創り出していく基礎となる方法と認識を獲得することである。

③カリキュラム開発における「正当化」

ＮＲＷ州のスポーツ指導要領開発プロセ

スでは「正当化」が重要な視点となっている。目標・内容を中心とするカリキュラムの内実の「正当性」と、カリキュラム開発の手続きや手段の「根拠づけ」が問題となる。両者は不可分の関係にある。

目標・内容の正当性を担保するのは目標・内容編成の原則を踏まえたものであるかどうかであるが、同時に、正当化に向けた当事者の合意形成と了解（相互批評・論議−情報公開−共同決定−実践的検証）が不可欠である。

（６）子どもの学びの経験・履歴と学習成果

カリキュラム評価のための重要な情報は、子どもの学びの経験・履歴と学習成果の実態である。それは体育実践の目標・内容の現況を映し出していると予想される。

ここでは「体育授業における学びの履歴測定バッテリー」を用いた調査結果の分析・考察の成果を記す。

①学習成果と学習の構えの男女差

「学習の成果」次元においては、「楽しさ感得」「運動有能感」「健康・身体」の３因子で男女間に差が認められた。「学習の構え」では、「積極的参加」因子で有意差があった。女子の半数以上が「学習の構え」のタイプでいうと「消極的参加型」「授業回避志向型」を示し、「学習成果」の低得点につながっていると推察される。男子では「息抜き志向型」が多いことを考え合わせると、体育授業におけるジェンダーバイアスが示唆される。

②学習成果と学習の構えの関係

「自発的学習」「教え合い」「積極的参加」のいずれの因子も高い「学習志向型」が最も高い「学習成果」を示し、「息抜き指向型」「消極的参加型」「授業回避志向型」の順となった。体育実践の学習成果の改善のためには、とりわけ女子に多い「消極的参加型」「授業回避志向型」の構えを変容させる方策が求められる。

③教師の指導性タイプと学習の成果・構え

教師の指導性タイプのうち「認知的指導」「学び方指導」「肯定的相互作用」「雰囲気づくり」のいずれの因子も高い「教え−学び融合型」が、最も高い「学習成果」をもたらしていた。それは７割近い子どもに「学習志向型」の構えを形成し高い「学習成果」をもたらし、さらには「教科体育への有用さの認知」を高めていた。確かな学習成果と学ぶ意味を見出した子どもはさらに「学習志向型」の構えを強化することが期待できる。

しかし、「教え −学び融合型」は全体の２割にとどまっているという実態がある。「授業不成立型」「教科内容不在型」が３割にのぼっている。また、「雰囲気づくり」「学び方指導」「肯定的相互作用」はあるが、「認知的指導」が行われない「自己ペース型」は、「教え−学び融合型」についで高い「学習成果」をもたらすものの、「体育への有用さの認知」は有意に低くなっていた。「認知的指導」が行われていないことが影響していると推察される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４６　件）

① 丸山真司、教師による体育カリキュラム開発モデルの検討、愛知県立大学児童教育学会論集、第 43 号、2009、pp67-79、無.

② 海野勇三、中島憲子、体育の学力と評価研究への一視角、たのしい体育・スポーツ、第 28 巻第 1 号、2009、pp40-42、無.

③ 田中新治郎、黒川哲也他 2 名（1 番目）、高校体育における実践的研究－「42.195km リレー」高校生はなぜ走ったかー、臨床教育研究、第 19 号、2009、pp111-128、無.

④ 森敏生、体育同志会は発達の階梯をどう考えるのか、たのしい体育・スポーツ、第 27 巻第 11 号、2008 年 11 月、pp27-30、無.

⑤ 中瀬古哲、文化としてのスポーツの意義を「体育理論」でどう教え学ばせるか、体育科教育、第 56 巻第 13 号、2008、pp46-50、無.

⑥ 森敏生、体育科教育における身体形成論の基本問題、現代スポーツ研究、第 9 号、2008、pp34-43、無.

⑦ 石田智巳、運動文化論と「身体能力」、体育科教育学研究、第 24 巻第 1 号、2008、pp19-24、無.

⑧ 丸山真司、ドイツにおける教師によるスポーツ指導要領の評価、日本教科教育学会誌、第 30 巻第 4 号、2008、pp89-98、無.

⑨ 中瀬古哲、子どもの関係性を変革する体育実践－子どもの社会的発達と体育指導の可能性と課題－、たのしい体育・スポーツ、第 27 巻第 8 号、2008、pp18-21、無.

⑩ 田中新治郎、佐藤康一他 3 名（1 番目）、子どもたちの健康観・スポーツ観・体育観の来歴を探る、臨床教育研究、第 18 号、2008、pp74-109、無.

⑪ 森敏生、スポーツ文化の発展を捉える視座－平和と非暴力の文化としてのスポーツ－、運動文化研究、Vol.24、2007、pp1-5、無.

⑫ 石田智巳、子どもの観を変える運動文化の学習、たのしい体育・スポーツ、第 26 巻第 6 号、2007、pp28-33、無.

⑬ 石田智巳、体育授業では実技は何のため

にするの、学校教育、No.1075、2007、pp48-51、無.

⑭ 田中新治郎、教育活動への反省的評価と体育の授業づくり、学校教育、No.1075、2007、pp12-17、無.

⑮ 丸山真司、ドイツの学校スポーツにおけるオリンピック教育の展開、愛知県立大学児童教育学科論集、第 40 号、2007、pp61-74、無.

⑯ 中島憲子、海野勇三、鐘ヶ江淳一、中・高校女子生徒にとっての体育の今、たのしい体育・スポーツ、第 26 巻第 6 号、2007、pp12-15、無.

⑰ 森敏生、石田智巳他 5 名（1 番目）、体育科教育学における活動システム論の検討、日本教科教育学会全国大会論文集、2006、pp67-70、無.

⑱ 中瀬古哲、森敏生他 5 名（1 番目）体育科教育における「社会的発達課題」の位置づけと内容、日本教科教育学会全国大会論文集、2006、pp71-72、無.

⑲ 石田智巳、佐々木賢太郎の「生命を守る体育」について、体育学研究、第 51 巻第 3 号、2006、pp325-339、有.

⑳ 丸山真司、学校を変える「起爆剤」としての体育のカリキュラムづくり、体育科教育、第 54 巻第 5 号、2006、pp20-23、無.

〔学会発表〕（計　１０　件）

① 森敏生（代表）、体育科教育における異質協同の学習の構成、日本スポーツ教育学会、2008 年 10 月 11 日、奈良教育大学.

② 石田智巳（代表）、体育授業における子どもの認識発達に関する研究－小学校 4 年生と 6 年生の水泳授業から－、日本スポーツ教育学会、2008 年 10 月 11 日、奈良教育大学.

③ 海野勇三（代表）、現行学習指導要領下の小学校体育授業の実態－子どもの学びの経験・履歴と学習成果の関連に着目して、日本スポーツ教育学会、2008 年 10 月 11 日、奈良教育大学.

④ 森敏生（代表）、体育科教育における身体形成論に関する基礎的考察、日本体育学会、2007 年 9 月 5 日、神戸大学.

⑤ 中瀬古哲（代表）、体育科教育における「社会的発達」の位置づけに関する基礎的考察、日本体育学会、2007 年 9 月 5 日、神戸大学.

⑥ 丸山真司（代表）、ドイツにおける教師によるスポーツ指導要領の評価、日本体育学会、2007 年 9 月 5 日、神戸大学.

⑦ 石田智巳（代表）、運動文化論と「身体能力」、日本体育科教育学会、2007 年 6 月 23 日、早稲田大学.

⑧ 森敏生（代表）、体育科教育学における活動システム論の検討、日本教科教育学会、2006 年 12 月 2 日、大阪教育大学.

⑨ 中瀬古哲（代表）、体育科教育における「社会的発達課題」の位置づけと内容、日本教科教育学会、2006 年 12 月 2 日、大阪教育大学.

⑩ 海野勇三（代表）、スポーツ・リテラシーに関する基礎的研究（３）－Physical Literacy に関する一考察－、日本スポーツ教育学会、2006 年 11 月 18 日、びわこ成蹊スポーツ大学.

〔図書〕（計　３　件）

① 中西匠・森敏生（編）、創文企画、中村敏雄著作集４　部活・クラブ論（「解説」）、2009 年、pp304-316.

② 丸山真司（編）、創文企画、中村敏雄著作集３　体育の教材論（「解説」）、2008 年、pp310-322.

③ 中瀬古哲、軽水社、キャリア教育と学習集団（「キャリア教育推進のための研究マネジメント所収」）、2007 年、pp51-60.

６．研究組織

(1)研究代表者

森　敏生（MORI　TOSHIO）
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：３０２００３７２

(2)研究分担者

海野　勇三（UNNO　YUZO）
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１５１９５５

丸山　真司（MARUYAMA　SHINJI）
愛知県立大学・文学部・教授
研究者番号：１０１５７４１４

田中　新治郎（TANAKA　SHINJIRO）
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：７０１９７４３２

中瀬古　哲（NAKASEKO　TETU）
県立広島大学・人間文化学部・教授
研究者番号：００１９８１１０

中西　匠（NAKANISHI　TAKUMI）
武庫川女子大学短期大学部・准教授
研究者番号：１０２５９６０８

石田　智巳（ISHIDA　TOMOMI）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：９０３１４７１５